

Dom/Subユニバーズ

上手な孤独の分け合い方

体験版

1話

相性という言葉があるとして。合う、合わないの好みに関しては、ある程度受け入れられる人同士のえり好みだと僕は思う。だから根本的に嫌われていたり、生理的に無理な場合、スタートラインにすら立てない。

あとは、生死に関わる問題が必ず発生する場合も。

「呼んでいただいて、チップまでいただいたのに申し訳ないですけど、あなたとは二度とプレイしたくないです」

強烈な拒否に、予想していたこととはいえ深く傷つく。一時間のショートコースで発散された欲求の分スッキリしていたはずなのに、一気にストレスがたまった。

だけど仕方がない。これは彼のせいではなく、僕の問題だから。

「ごめんね、本当にごめん」

僕だって、できるなら無理強いをしくはない。チップをはずんで、お金の関係を築きたいわけでもない。たくさんの人を愛せなければ満足しない、なんてこともないんだ。けれどこの強すぎるDomの力に耐えられる人がいない。だったらせめて、お金を払えばという前提で会った人であっても、こうして毎回否定され続ける。偽りでも愛情を注いだはずの人に完全拒否されて、心が沈んでいく。

体が軽くて、頭が重い。制御できない体質を憎んでも、恨んでも、変わることはない運命。悲しいけれど、もう諦めている。

僕はきっと、愛したい対象から永遠に拒否され続ける人生になるのだと。



「関、こっちこっち！」

「ちょ、鷺原、大きい声で呼ぶなって……！」

「だってデカイ声じゃないと聞こえないだろ？お前って最強のD o mのくせに、肝っ玉も金玉も小さいよな」

「なっ、金玉はみたことないだろ！」

「トイレでチラ見した」

木で出来た扉の傍で、手を振りながら僕を呼ぶ彼は、高校時代からの腐れ縁で友人の鷺原だ。同じダイナミクスで、高校では部活とクラスが三年間一緒、大学では学部は違えど同じ大学に進学したこともあり、社会人になってからも月に一度は会う仲。

今日は彼からの誘いで、人生で初めてハプニングバーに来た。なんでも、今日はこのバーで特別なショーがあるらしく、それをどうしても僕に見せたいらしい。本来ここに入るのは成人の証明書があれば問題ないそうだが、今日はダイナミクスの証明書も必要で、D o m、もしくはパートナー持ちのS u b限定だ。随分限られた人にだけ解放されるようだが、一体何が行われるというのだろうか。

受付を済ませてから、ドリンクチケット代金も払って、僕らは各々カウンターでアルコールをもらってから、空いている席に座った。見た目がそれほど派手では無い僕らは、目立つ方ではない。ステージが見える席の中でも端の方に座って、ショーが始まるまでのんびりと過ごす。慣れているのか、スマホをいじってくつろぐ鷺原に、僕はとりとめのない話をした。

「ハプニングバーなんて初めて来た。でも、S u bはパートナーがいる人限定って不思議だな」

「今日のショーは特殊らしいからな。一人で来られたら店も困るんじゃない？」

「店が困る……？」

「まあ、関にはほぼ影響ないって。あと十分くらいしたら始まるし、楽しみにしておけよ」

ふふ、と楽しそうに笑った鷺原に、僕はなんとも言えない表情を向けながらカクテルを傾けた。ちびちび頼んだアルコールを飲みながら、周りを見渡す。

条件付きで入れるとは言っても、S u bはほとんどいない。数える程度のS u bと、溢れんばかりのD o m。しかも僕たちのように地味な人はほぼおらず、大体の人が屈強そうで、少なくとも華やかなD o mが多かった。随分えりすぐりばかりが集まるのだなと思っているところで、客席の照明がふと暗くなる。そうして浮かび上がるのは、ライトアップされた真ん中のステージ。

ステージの右の方から、コツコツと靴音を響かせて、スーツ姿の男性がやってきた。彼はマイクを片手に、深いお辞儀をして話し出す。

「お待たせいたしました！それではお待ちかね、当店の看板S u b、ムクのショーの始まりです！」

彼の言葉を皮切りに、周りにいた音楽隊が楽器の演奏を始めた。にぎやかな音楽と共に、会場が一気に盛り上がる。その歓声を胸に浴びる男性が、ステージの奥からゆっくり歩いてきた。

真ん中に立ってライトアップされたのは、前が大きく開いた燕尾服を着た男の子だった。露出した肌が綺麗で、つつい目が行ってしまう。けれど、光を反射する白い胸部分をうっかり見てしまうのは、僕だけじゃないと思いたい。自分より少し若く見える彼は、モデルのようなポージングをして会場を見ていた。強い目力が印象的で、それが逆に屈服させたいD o mの気持ちをそそるのだと感じる。人を少し見下すような笑みをたたえた彼は、いい意味でS u bらしくなかった。

一瞬で広い会場の視線を釘付けにする彼に、僕も思わず見とれる。

「誰にも跪かないS u b」

それ故に、鷺原が言ったことへの返答が遅れた。え、と問い返すと、楽し気に笑う彼がもう一度同じ言葉を繰り返す。

「彼の異名というか、キャッチコピーみたいな感じさ。それが、『誰にも跪かないS u b』」

「誰にもって、どういう？」

「見てれば分かるよ」

それだけ言うと、鷺原は視線をステージに戻した。含みのある言い方に僕も首を傾げつつ、同じようにステージを見る。一番華やかな部分の音楽が終わったのか、ムクと紹介された男性は、腰に手をあてながら近くの男性に投げキスのサービスをしていた。それに沸く会場に向かって手を振る最中に、司会が本日のショーの内容を話していく。

「さてさて、今日は特別な日！なんとムクに直接G l a r eをかけられる大チャンス！D o mの皆さん！この彼を今日こそ自分のモノにできますかな！？」

司会の台詞と共に、不敵に微笑むムクを見て、雄たけびのような歓声が沸いた。だが僕は、彼らとは一歩引いてただただ驚いてしまう。

いくらショーの一貫とはいえ、S u bに直接G l a r eをかけるなんて。無遠慮にそんなことをしたら、彼がバッドトリップを起こしてしまうかもしれない。どんな症状を引き起こすか分からないじゃないかと、とにかく肝を冷やした。公の場でG l a r eに耐えられるなら、もしかすると実はムクがS u bではないのかとも勘ぐったが、流石にその嘘はバレてしまいそうだ。ならば場合によっては死に至る危険性も含めてこのショーが行われているのかと思うと、僕の心臓は嫌な鼓動を刻んでいく。けれども隣の鷺原ときたら穏やかなもので、軽い笑みを崩さずステージを眺めていた。

「では危険ですので、パートナー持ちの方はお気をつけて！ムク、意気込みはどう？」

「意気込み？そんなないね。誰でもいいからかかって来いよ、ポンコツD o mのお兄さん方。お得意のG l a r eで屈服させてみな」

ふん、と鼻を鳴らして煽る彼に、会場はまたしても沸き立った。音楽すらも、彼の言葉を後押しするようにアップテンポになる。おいおいなんてことを、一步間違えたら精神が崩壊するかもしれないんだぞなんて慌てているのは僕くらいなもので、後は殺気すら匂わせるD o mばかり。とんでもないところに連れてこられたと、僕は早々に帰ろうとしたら、鷺原から腕を掴まれる。

「さぁ！我こそはという挑戦者はいらっしゃいませんか！？ムクにG l a r eをかけて、今日こそ膝をつかせる猛者は現れるのか！？」

司会の一言に、わぁっとあちこちで手が上がった。そして僕の片手も、鷺原によって上に持ち上げられそうになる。嫌だ、こんな危険なことはしたくないと腕を振る僕と、無理矢理に上へ上へと腕を掲げようとする鷺原による、誰にも得がない攻防が行われた。

「よしいけ、関！今世紀最大のチャンスだ、お前の本気を見せてやれ！」

「むっ、無理無理無理、できないよ！危ないし！」

「え～？お前なら絶対行けるって！見た目的にもフツメンだろ？ムクが油断してるころを
だな」

「そんなのできないって！パートナーにもなってない S u b に G l a r e をかけるなんて無理！」

「なんだよ。せっかく面白いのが見れると思ったのに、残念」

けれども俺の強い抵抗に、鷺原が先に折れた。というより、最初の挑戦者が選ばれたため、静かにせざるをえなかったとも言う。セキュリティと思わしき男性からジロリとにらまれた僕らは、軽く会釈して大人しくした。

「まあいいや。他人の G l a r e なんかも普段見れないし、観客になるだけでも楽しいか」

そういった鷺原は、残り半分を切ったドリンクを傾けながら、選ばれた屈強そうな男性を見ていた。一緒に来ていた人たちからのエールを受けた彼は、筋骨隆々といった雰囲気、恰幅もいい。ひと目見ただけで、強い D o m だと誰もが分かる見た目をしていて、ステージに立つと、胸にピンマイクを付けられた彼と、ライトアップされたムクが対峙する。

「君が c o m m a n d を聞いたら、アフターも期待していいのかな」

「望むところ」

彼らのやり取りが会場内のスピーカーから聞こえると、いよいよ会場内のボルテージは絶頂だった。壁が破けそうな盛り上がりを見せる中、僕はあわあわと口を開閉させていた。なんて催し物だ、アフターだと？ケアをするわけではなく、場合によってはお仕置きと称して暴力を振るわれるかもしれないのに。安請負もほどほどにした方がいいと、ムクの親でもないのに心配してしまった。だけれど僕が慌てようとも、司会は会場をなだめつつショーを進めていく。

「さあて、それでは一人目のチャレンジャー！これでムクが虜になったらアフター確定だ！ではお兄さん、張り切ってどうぞ！」

そして司会の人々が挑戦者に声をかけると、彼は間髪入れずに構えてもいないムクに G l a r e を放った。その威力たるや、ステージからそれなりに距離のある僕らの肌をピリつかせるほど。近場にいる D o m の中には、震えが止まらなくなる人や気絶する人も出たようで、倒れ込む音が次々に聞こえてきた。

「きつつ～」

隣の鷺原も、目をしかめて肩を握ってきた。ふう、と一息つく彼は、流した汗を補うためか、残っていたドリンクを一気に煽る。D o m 同士の強弱は、見た目よりもこのG l a r e で確定することが多い。外見では補いきれない、本来の強さが露骨に現れるからだ。ステージに立つ男性から放たれたG l a r e は、弱いD o m が食らえば失神は免れない強さがあった。パートナーもちのS u b ですら、床に這うものも現れ始めている。

僕もD o m とはいえ、ビリビリと露出した肌に静電気が纏わりつくような感覚はあった。それを間近で浴びたとなれば、あれほど高飛車に煽っていたムクと言えども無事ではいられないだろう。一体どうなってしまったんだと心配しながら、恐る恐るステージを見る。

でもここで、僕は目を疑った。

「.....で？まさかこれで終わり？」

この声を聞いて、自分の耳の機能も疑った。今起きていることは、現実なのかと。数多くのD o m が倒れる程のG l a r e 。あれが弱かったとは到底思えない。それを食らったS u b ならば、狂ってもおかしくないほどの威力があったはずだ。

それなのにムクは、毅然とした態度でステージに立っていた。人を見下す表情も変わらないどころか、汗ひとつかいていない。もちろん、膝もつかずに両足で立っている。あまりにもG l a r e の前後で変化のないムクに、絶望したのはむしろ挑戦者のD o m だった。彼は、本能がムクを屈服させようと躍起になっているのか、立て続けにG l a r e を放つ。それは、二度、三度と続いたものの、ムクは動じない。動じないどころか自ら彼の方へと歩き出し、震える彼の股間を蹴り上げた。

「残念、俺の勝ち！」

楽し気に笑って、股間を抑えて膝をつくD o m の肩に足を置く。それを見た会場は、またしても大いに盛り上がった。

「さすが噂通りの強さ！あれが絶対に跪かないS u b か！」

隣にいる鷺原も、拍手したり、口笛を吹いて歓声を送っていた。これは盛り上がってきた、とおかわりのドリンクを近くのウェイターに頼む始末。そんな彼に対して、何を呑気に楽しんでいるんだとやきもきする部分はあるが、ムクへの称賛は同じだった。

「凄い、あのG l a r e を間近で浴びたのに」

「な、な、言った通り面白いショーだろ！ってわけで、次の挑戦者呼ばれてるぞ！今度こそお前の出番だ、関！」

「だから行かないって！」

そして盛り上がるのは会場全てで、次こそは、我こそはとあちらこちらで手は上がった。弱いD o mであれば他者からのG l a r eで立ってられなくなるなかで、最も至近距離で全ての攻撃を受け続けるムクはすましたものだった。他のパートナーがいるS u bはいつの間にか全員いなくなっていたというのに、ムクだけはステージに立ち、もちろん膝が崩れる瞬間は一瞬たりともなかった。それどころかファンサービスで踊り、時には会場を煽りと、誰よりもパフォーマーとして会場を盛り上げていた。

そして、時間めいっぱいまで挑戦者がG l a r eをし続けたが、終了のゴングがなり、本日のチャレンジは幕引きになる。

「今日も俺の勝ち。今までもこれからも、誰も俺を跪かせることはできない」

観衆の大歓声と、彼を称える音楽を背に、颯爽とステージを後にするムクは、誰もの憧れの対象になっていた。僕もしなやかな彼の後ろ姿を見て、確かに凄いと尊敬はする。でも同時に、少しだけムクのことを心配してもいた。

G l a r eに怯みはしなかったものの、彼はおそらく嘘偽りのないS u b。それなのに、あれほどまでD o mになびかないことが、たまたまできない体質なのだとしたら。彼は一体どうやって欲求を発散してるのだろうか。

「僕と同じ……？」

「ん、なんて？」

「え、あ、いや、なんでもない。ムクって凄いなと思って」

一人で考え込んでいたら、思っていたことがつい口から漏れていたようだ。けれど賑やかな会場では細かい言葉は聞こえなかったのか、鷺原から聞き返されてしまう。それに取り留めのない返事を返しているうちに、ムクの姿は見えなくなっていた。

誰にも跪かないのは、凄い事だと思う。でもそれはここでのショーの話で、もしもプライベートでもD o mの言葉に従えない場合は、プレイができないということだ。それはプレイをしたら必ず拒否をされる僕と、真反対だけど似ている。

彼も僕と一緒に、誰にも受け入れられない孤独感を抱えてはいないのだろうか。もしもそうだとするなら、ひょっとしたらと淡い期待を抱く。けれどすぐに、そうやって何度心を挫かれてきたんだよ、浮かれるだけ無駄だと、心の中の自分がたしなめた。

それに、もし仮にプレイの相性が良かったとしてもだ。これだけのD o mを魅了する華やかな彼と、どこにでもいる凡人の僕では、釣り合うわけもない。住む世界が違い過ぎる。結局、相性だけの問題でもないんだよなと、いつの間にか氷の溶け切ったドリンクを乾いた喉に流し込んだ。でもぬるいアルコールは甘くて喉に張り付くようで、僕の喉をほとんど潤してはくれなかった。

ショーが終わると、次の催し物が始まるまでは一旦休憩になった。第一部と第二部に分かれていたようで、ここからはS u bも参加が可能になるらしい。空気が入れ替わって賑やかになる会場では、次なるパートナー探しが盛んに行われていた。僕たちのところにも数名のS u bがやってきては、とりとめのないことから、少々下品なことも含めて話しをしていく。けれど、鷺原がスマホの画面を見て顔色を変えたので、僕は本日の飲み会の終わりを察した。

「あ～、皆ごめんね！関もごめん、仕事で呼び出した」

「いいよ。忙しいのに誘ってくれてありがとうな」

「いやいやマジで今日は大丈夫だと思ったのに！世間は俺を暇にさせたくないらしい。人気者はモテちゃって困るね」

ごめんね～と謝る鷺原は、皆で飲んでと大きめの金をさっとテーブルに出して、会場を後にしてしまった。僕はというと、正直こういう場所に慣れていないので、一人にされると緊張してしまう。それなのに隣のS u bに阻まれて、鷺原を外まで見送るという最も便利な逃げの口実づくりに失敗した。このタイミングで急に、僕も帰るねと言ったら角が立ちそうだ。どうにか無難に退散しなければと考えた末、一度トイレで席を立ててから、自然に会場を立ち去る作戦を試みた。

しかしながら、会場のビルは広く、かつトイレで盛っている連中も多々いるようで、なかなか空いているトイレが見つからなかった。こうなることも踏まえて周辺の店のトイレも貸してもらえよう頼んでいるとのことで、比較的会場から近い店を何件かセキュリティに教えてもらう。でも、いくつか教えてもらったうちのひとつで用は足せたものの、暗い細道を

通って歩いてたため迷ってしまった。しかもここにきてスマホの充電も切れたため、地図アプリによる案内も困難になる。

「参ったな」

せめて会場まで辿りつければ、そこから駅の帰り道は分かるけれど、慣れない道を徘徊する。風俗街の裏路地は、どんより暗く気味が悪かった。せめて明るい通りに出ようかとも思ったが、あまり遠くに行くと会場の位置も分からなくなってしまいそうだ。さて、ここからどう動くのが正解だろうか。

しかしそうやって迷子なりに頭を捻っていると、ガシャンと何か落ちる音と、人が荒い息をしている音が近くから聞こえた。それは自分の背後から数メートルほど行った先。小さな建物の隙間を覗くと、明かりが漏れるドアが見える。どうやら物音は、その扉の中から聞こえてくるようだ。もしかしたら誰かのプレイ中ではと勘ぐったが、c o m m a n dの声は聞こえてこないで、そっと扉の外から声をかける。

「あ、あの、大丈夫ですか？すごい音でしたが……」

「……、ほっといて」

でも僕は、中から聞こえてきた声を聞いて目を見開いた。思わず放っておけと言われた言葉とは反対に、勢いよく扉を開く。

するとそこには、膝を抱えてしゃがみこむ、少しだけ卑猥な燕尾服を着た男性がいた。ゆっくりと顔を上げた彼は、顔色だけは悪いが知っている顔だ。切れ長の目に、しなやかな体躯。忘れもしない。彼こそは、「誰にも跪かないS u b」のムクだった。

ステージ上では光を反射してよく見えなかったが、黒髪黒目の彼は、やはり僕より少し若いくらいの歳のような。その彼が、息を荒くしてうずくまっている。じっとりと額に汗を浮かべる様子を見ると、体調が悪いのは丸わかりで、彼の望み通りに放置することはできそうになかった。初対面では失礼に当たるかと思ったが、ムクに手を伸ばさず。

「すごい汗ですけど、大丈夫ですか？水とかあったほうが」

「大丈夫じゃないのくらい見て分からない？あと水はいらない。これは水飲んで治るやつじゃないし」

ふう、と息を吐いて、僕の問いに答えながらも何かを堪えるムクは、時々震えを抑えるように肩をさすっていた。それが寒気からくるものではないと気づいたとき、僕はすぐに合点がいった。

彼は今、ケアが足りていないことによって、バッドトリップになりかけているのだと。

散々G l a r eを浴びても、難なく立っていられた現場を見た。だからG l a r eが効かないのは本当だとしても、彼にだってS u bの本能はある。それならきっと、D o mからの強い否定で心は傷つくはずだ。あのステージでは、負けたD o mから罵倒されたり、手を出されかける瞬間もあった。きっと周辺からも、相当数の煽り文句が飛んできていただろう。だから直接のG l a r eで膝を折ることはなくても、とても辛い瞬間が多々あったに違いない。しかもそのケアを受けることもできていないまま、ずっと放置されている。ムクの身体や精神に、かなりの負荷がかかるのも納得だ。

でも僕はどこかで、そんな彼を見て安心してもいた。そうか、ムクは確かにS u bなんだなと。けれどそれをムクに言うと、彼は露骨に不機嫌になってしまった。

「君は、本物のS u bなんだね」

「はぁ？なんの疑い、それ」

「強そうな人たちのG l a r eを受けても平気そうだったから」

「まァ、あれぐらいならね。てか、放っておいてって言ったんだけど？さっさとどっか行けよ」

むすりと顔をしかめたムクは、僕を突っぱねてまた膝に顔を埋めた。けれど、震えはひどくなっている。さて、どうしたものか、何かこの倉庫のようなところで使えるものはないかと周りを見渡すと、彼の足元に銀の包みが落ちていた。それを拾ってパッケージを見てみると、どうやら彼の心を落ち着かせる鎮静剤のようだった。しかも、副作用がかなり強いと言われている、医者からの特別な許可がおりなければ使えない代物。それを飲んでもこの有様かと、僕はため息をつく。

「仕事柄、薬には詳しいんだけど。これ飲んでも効かないんじゃ、今すぐ病院に行くか、誰かにケアしてもらうしかないよ。このまま放っておいたら、命に危険がでるかもしれない。誰かケアしてくれる人にあてはないの？かかりつけの病院は……、流石にこの時間は開いてないか」

「はぁ……。もう、うるさいなァ。なんなの、さっきから。もしかして、お兄さんもD o mなの？だから俺に絡んでくるわけ」

けれど僕が説得を試みても、ムクは不敵に笑うだけだった。それどころか反抗的な彼は、よろめきながら柵に手をつけて、何とか立ち上がる。そして肩で息をしながら、挑発的に僕を見下ろした。

「アンタも俺のショー一見て興奮した？おさまりつかない感じ？そんなに俺とプレイしたいなら、なんか命令してみたら？」

「それは、僕に対してケアしてほしいってお願い？だったら先に、セーフワードを決めないと」

「いらぬよそんなの。どうせアンタみたいな弱小D o mのc o m m a n dなんて効かぬし」

はっと鼻で笑うさまは、先ほどステージで見た時と全く一緒だった。それが強がりなのか、そもそも素の彼がこうなのか、僕には判断できない。ただ、せっかく優しさでケアを申し出たというのに、それを否定されて腹が立ったのは事実だった。だからほんの少しだけ、僕のG l a r eが漏れる。

ピクリと、ムクの目が揺らめいた。それに彼も気が付いたものの、僕からの影響であることは気づかなかつたらしい。けれども、ここで僕は確信した。

ムクは必ず、僕のc o m m a n dを聞くと。

「何、黙りこくっちゃって。ビビってんの？まゝそうだよ、俺のショー見たなら分かるでしょ？俺は誰に命令されても跪くことはない。ましてやアンタみたいな貧弱な」

「ムク、セーフワードは？」

「はあ？まだ言ってるの。いらぬって言ったんだよ、そんなの！」

「そう。それならムク、Kneel（お座り）」

僕がそう言うと、突如かくんとムクの膝から力が抜けて、片膝を立ててしゃがむ僕の目線と、ぺたりと地面に膝をつく彼の目線が同じ高さになった。あっけにとられる彼の目は、この僅かな命令でもほわりと溶けかけている。

「……は？」

「ムク、Look（こっち見て）」

状況が飲みこめていないムクは、目を泳がせながらも僕を見た。なんで、どうしてと言葉にせずとも、十分に表情から読み取れるほど動揺しているのが手に取るように分かる。彼か

らしたら、突然現れた平凡な僕からの c o m m a n d で、あっけなく膝をついたのが信じられないに違いない。

でも実は、驚いているのは僕も一緒だった。バッドトリップ一歩手前ということは、僕の c o m m a n d を受け入れられたとしても、一個目の c o m m a n d で限界だと思っていた。それが二つも聞けて、かつ意識を保っていられるどころか、まだ自分で話すこともできるらしい。

僕からしたら、感動ものだった。だって僕の c o m m a n d を受け入れても、ここまで意識を保ってられるSubは、そうそう現れなかったから。興奮のあまり、心臓が痛いくらいに高鳴っている。けれど、相手は重症患者だ。ひとつ間違えたら精神疾患に陥りかねないので、様子を見ながら慎重にプレイを続ける。

「.....え？あ、あれ、俺、なんで」

「大丈夫。ちゃんと僕を見て、ムク。目をそらさないで」

僕に言われた通りの行動を取る自分が信じられないのか、ムクは目を見開いていた。けれど、はく、はく、と開く口は、呼吸とは違って何かを訴えている。それを堪えようとするのは、見ていて痛々しくくらいだ。

「ムク、教えて。君は今、本当はとても苦しいんだよね？」

「っ、違う、俺は、俺は何とも」

「嘘をつかなくてもいい。怒らないから言って、ムク。Say（教えて）」

少々強引な駆け引きにはなってしまったものの、これ以上のストレスを抱えていたら、それこそムクを壊す引き金になりかねない。だったら彼が抱えている不安を言ってもらった方がいいと判断して、c o m m a n d を使う。するとムクは、ぎゅっと一度唇を噛んだ後、ポロリと瞳から涙を零した。それを見た僕がぎょっとすると、僕から目を逸らせない彼が、心の中を打ち明ける。

「く、る、しい」

「.....何が、苦しいの？」

「誰の命令も、聞けないのが苦しい。お前はS u b じゃないって言われるのが辛い。いらな
いって言われると、死にたくなる。俺は悪くない、悪い子じゃない、のに。なんで、俺が、
いっつも悪者になるんだ。わざとじゃない、俺がc o m m a n d を聞けないのも、G l a r e
e が効かないのも、たまたまなのに.....！」

ひく、ひく、と喉を震わせながら、彼はゆっくりと言葉を続けた。彼を刺激しないよう、同じぐらいの速度で頷く。けれど涙を流す彼に同情するよりも、僕はまるで自分のことのようにだと思いつながら彼の言葉を聞いていた。

誰にも命令を聞いてもらえないのが苦しかった。お前みたいなD o mはいない方がいいと言われるのが辛かった。存在を否定されると、この世から消えてしまいたくなかった。それでも抗えない本能と欲求をコントロールするのに、僕がどれだけ苦しんでいるか、誰も知らないくせにと。何度も何度も、頭を抱えた。強すぎるダイナミクスに生まれてきた自分を呪った。でも、自分や他のS u bを責めても、一生どうにもならないと思っていた。

今日ここで、彼にc o m m a n dを使うまでは。

「Goodboy、ムク。教えてくれてありがとう。君はとてもいい子だ。悪い子なんかじゃない。大丈夫、もう大丈夫だからね」

僕がそう言って彼を抱きしめると、はっとムクは息を止めた。同時に彼の全身の震えが、嘘のようにピタリと静まる。そのムクの様子を見て、僕の方が感動でぶるりと身震いしてしまった。

初めてプレイが成功した。生まれて初めて、Subに受け入れてもらえた。僕がSubをケアできた、と。あまりの喜びに舞い上がった僕は、つい浮かれてプレイを続行してしまう。

「ムク、いい子だね。たくさん撫でてあげるから、もっと近づいてごらん？」

「ふ、っ、あ、あ」

とろりとふやけた息を吐く彼は、きゅっと僕にしがみついてきた。その愛らしさに思わず僕もうっとりして、何度もムクの後頭部を上から下に撫でる。手の平の感触が心地よかったのか、ムクもうっとりとした顔で僕を眺めてきた。

彼の身体の震えは止まったものの、呼吸はまた荒くなってきた。けれどこれは、体調不良によるものではない。どうやら彼は、サブスペースに入りかけているようだ。まさか僕とのプレイでスペースに入れる人がいるとは想像もしていなかった。そのせいで、彼の熱と同じように自分の股間も熱くなっていく。ムクが甘えるように、グリグリと自分の熱を僕の膝に押し付けてくるのは、おそらく本能による無意識の行動だろう。それで簡単に興奮した僕は、ごくりと喉を鳴らして、図々しくも次のc o m m a n dを放っていた。

「ムク、Present（見せて）」

僕の声に従って、彼はころりと背を床に付けた。ズボンのベルトを緩めて、膝のあたりまで服をおろす。唯一残っていた下着からは、ぷるりと震える彼の熱が飛び出してきた。思わず口内に溜まった唾液を嚥下する僕と、頬を染めて膝を抱えるムクの目が合う。

「触ってほしい？」

僕の問いかけに素直に頷く彼は、ステージの上でD o mの股間を蹴り上げていたムクとは大違いだ。けれどおそらく、今の彼は演技で作られたものではない。従順なその姿は、まさしく万人が想像するS u bそのもの。そして僕が長年求めていた、僕と対等でいられるS u bでもあった。

この状態に至るまでに、失神したり、自我が壊れかけるほど取り乱すS u bも大勢いた。だから、こんなにも穏やかな気持ちでS u bの性器に触れることは無理だと思っていた。それゆえに、ムクの熱に触れた時、少年に戻ったような気持ちになる。生々しい肉の温度と質感を感じるだけで、手の平が焼けてしまいそうだった。

衝動的にこの手を動かしたいのに、大事にしたい。ただほんの少し触れ合っているだけなのに、鼓動はかつてなく早くなった。

「ん、あっ」

ぴく、と僕の手に応じたムクが声を上げる。明らかに快感を感じ取って出した甘い声。僕の手から受け取った刺激でそうなったんだと思うと、背中一面が逆立つような感覚が湧き上がった。歓喜に震える手は、手探りで彼の気持ちいい場所や触り方を確かめていく。

「君はかわいい。それに綺麗だ、とても」

「ん、ん」

僕に褒められると、ムクは嬉しそうにはにかむ。けれど、どこかで恥ずかしい気持ちが残っているのか、僕と目を合わせず、自分の体の陰に隠れるように体を丸めた。それでもc o m m a n dに従う身体は、大事なところだけは開いたままだ。羞恥に頬を染めながら自分に服従するムクに対して、僕は並々ならない興奮を感じていた。初めてのプレイに高まる僕の欲求は、徐々にヒートアップしていく。

このS u bを更に甘やかしたい。たくさん愛撫して感じさせたい。感じる表情も、声も、何もかもが欲しい。全部を僕のものにしたい。

強欲ともとれる感情は、こんこんと腹の奥から湧き上がってきた。全身の血管が、かつてない血の巡りに耐えかねてはち切れてしまいそうだった。それでも心臓はまだ速度をあげ

て、目の前の彼に思いと欲をぶつきたいと暴れている。欲しい、欲しいと思ってやまない心と体が、まるで自分のものではないように感じる。

こんな感情が自分の中に潜んでいるなんて、今まで知らなかった。だからこそ、制御の方法も分からない。一步間違えれば、傷心の彼を更に傷つけかねないのに、乱暴にしたい気持ちまで出てきて混乱する。

だめだ、これはケアなんだから。傷つける目的じゃない。僕が満足するためにしているんじゃない。自分をはっきりもてと、グラつく頭を強く左右に振った。それでも冷静になれなかったのだから、僕は自分の親指に噛みついて自我を取り戻そうとした。ムクを傷つけるくらいなら、自分が傷つくべきだと判断して。

「っ、ううう……！」

「え、なっ、なに、してんだよ……！？」

けれどいきなり自虐行為に至った僕を見て、ムクはぎょっとしていた。彼としてみたらそれは当然で、自分を前にしてc o m m a n dを放ってきた人物が、突然指を噛んだら驚くだろう。けれどスペースに入りかけている彼は、うまく言葉を紡げていなかった。それでもとぎれとぎれに、血を流す僕を心配してくれる。

「い、痛いだろ、なんで噛むんだ……？そんなこと、やめろよ」

「違う、こうしなきゃいけないんだ。ごめん、我慢する、君を傷つけない。だから僕が、ちゃんと我慢しなきゃ……！」

けれど心配されているにもかかわらず、現金な僕の体は、先ほどのムクのように、自分の熱を服越しに彼に押し付けていた。それは明らかに入れたい衝動にかられている動き。ぐ、ぐ、と腰を動かす先にあるのは、彼の孔だった。生々しい欲が露呈していて、僕は逆に泣きたくなる。

「ちっ、違う、ごめん、ああ、どうして、どうして……！」

今まで散々プレイを失敗させてきた。なのにやっと、自分のc o m m a n dで狂わないS u bが現れたのに。そのS u bが、助けを求めているというのに。ケアの最中に、自分の欲求を押し付けそうになっている。大切な時に、自らのコントロールもできないなんて。

どうしてだ。彼を甘やかしたいのに。ムクを大切にしたいのに。きちんとアフターケアを行いたいだけなのに。何もかも上手くいかない。僕は泣きながら違うと言っては頭を振っ

た。それでも理性が安定しないせいで、どうにか自分を保つため、痛む親指ではない指を噛んだ。

「違う、違うんだ！僕は……！僕がっ、我慢するんだ、我慢、しない、と」

そして僕が自分と戦う中で、とうとう左手の無傷の指は小指だけになったとき。その場所にも歯を立てようと口を開くと、きゅ、と小指が握られた。

「もう、噛むな」

はっとして声のする方を見ると、悲しい顔をしたムクがいた。それを見てまた僕が顔を歪めると、彼は僕の手を口元に引き寄せて、ちゅ、と軽くキスをする。触れた唇の柔らかな感触は、緊張していた心に一滴の潤いを与えてくれた。

「俺に入れたい？」

直球な質問に、ぐ、と僕は押し黙った。当然のように首を縦に振りたいものの、そんな最低なことを傷つく彼に求めてはいけなidthoughtろうと思う。けれど自分を否定される辛さも知っているのて、ここて入れたくないと答えた場合、それはそれでムクの自尊心を傷つけてしまうのではないかと心配にもなった。どちらを選ぶべきなんだと悩んでいれば、その答えはムクから与えられる。

「ここ、入れる？このゴムなら、ローションついてるよ」

すつと握られた手がムクの孔にあてられて、僕はぞわりと毛を逆立たせた。欲を丸出しにした熱い息を吐き出すと、彼は近くの棚にあったコンドームを手にする。それを手に持ったまま、ムクは体勢を変えて四つん這いになった。そして顔の前にある僕のズボンのチャックを口で啜えて、ゆっくりと下に動かして行く。前にゆとりができると、遠慮なく突き出した僕の熱に、彼はほおずりする。

「すごい、おっきい、ね？」

物欲しそうな目で何度もなぞられて、布越しにキスをされた瞬間胸が跳ねた。心臓が張り裂けてしまいそうな衝動に駆られて、思わずムクを押し倒す。ダメだと頭で分かっているても止められなかった。彼の手からゴムをもぎ取って、口でパッケージを食いやぶり、乱暴に下着を下ろしてゴムを付けた。欲しい気持ちのままに彼に口づけをして、身体を抱きしめながら、一気に自分の熱を突き入れる。

「~~~~ッ！！」

大きく開いたムクの足が、ガクン、ガクンと揺れていた。その膝を抱えて、更に奥へと自分の昂ぶりをねじ込む。奥、もっと奥だと、彼の中に入っていく。その間も甘くなめらかな口内を散々味わっては、手入れの行き届いたきめ細かな肌を堪能する。撫でては掴み、また別の場所を撫でまわした。時々気持ちいい場所を刺激するのか、口の中に反響するムクの喘ぎ声がたまらない。

「ん、は、はあ、あ、ん、んんっ！」

ぎゅっと抱きしめられると、僕も幸せな気持ちでいっぱいになった。だから彼の頭を撫でては、反応のいい場所を擦って、耳元でいい子と囁く。僕の声聞いて、きゅうと締まる内部が素直で愛しい。彼に与えたい、今までのSubに与えられなかったものを全てを注ぎ込みたいと躍起になった。もっと求めてくれ、もっと欲しがってくれと願う僕は、ひたすら彼に感情をぶつける。

「かわいい、僕を受け入れてくれていい子だね、ムク。どこが気持ちいいの？教えて？そしてたらもっと褒めてあげる」

「っ、ふ、あ、も、もお全部、気持ちいい……！すごい、こんなの今まで、っん、あ、あ、あ」

僕に抱きついて悦に浸るムクは、さっきまで青白かった肌を赤く染めていた。僕を掴む指先からも、高い体温が感じられる。ひっかくようにかき抱かれるシャツも、夢中になっているから掴まれる髪の毛も、腰に巻きつく足にも、全て興奮した。

「あ、あ、ど、しよ、なんか頭、ふわふわする、かも」

完全にスペースに入ったらしい彼は、ふわりと僕に笑いかけてきた。その愛くるしい表情は、ステージの上で挑発的な態度を取っていた人物と同じとは思えないほど。僕がムクの本来の姿を引き出したんだと思うと、腹の奥がぼこぼここと沸騰しそうなくらいに煮えたぎっていた。僕が欲情している顔を見て、引っ張られるようにムクも甘い顔を向けてくる。

「も、っと、頂戴、撫でて、いい子って言って」

「はあ、っ、いい子、いい子だね、僕を受け入れてくれて、気持ちよくなれて」

「んっ、うん、気持ちい、奥、奥までして」

「こう？」

「ッ、~~~~っ！！」

グリグリと奥の方へ腰を進めてかき回すと、ムクは大きく身体をのけ反らせてよがっていた。乱れ方がどうしようもなく艶やかで、思わず腰を掴んでそこばかりを責めた。

「ひ、いう、ああ、だ、め、も、ダメになっ、あ、ふ、んんん.....ッ！！」

絞りだすような喘ぎ声をあげるムクを抱きしめて、無意識で引き腰になるのを強引に掴んで阻止した。想像以上に細い腰は、僕が全力で腰を動かしたら壊れてしまいそうだった。それでもいいからと、衝動的に自分の熱を中にねじ込んで引き抜いて、また差し込んでいく。肉同士がぶつかる音は倉庫中に響いていて、誰かが通ったらすぐに何をしているかが分かるくらい、ムクも声を出していた。それを止めることはせず、僕は優しく彼の頭を撫でた。

「おいで、ムク」

「はう、ん、んっ、んん.....」

もはや僕の指示通りに動く彼に、いかなる command を拒否する力も残っていないことはわかっていた。けれど、これほどまでにプレイを続けることができた彼に、遠慮はいらぬことも察しがつく。だから僕は、人生で一度も使ったことがない command を躊躇なく放った。しっかりと髪をかき分けて、聞き逃さないように、彼の耳元で。

「ムク、Cum (イッて)」

「ッ、あ、———ううっ！！！！？」

言葉を耳に入れた瞬間、彼自身も構える間もなく、びゅくりと彼の腹の上に精液が広がった。その光景を見て、途方もない優越感に浸る。僕がイカせたんだと実感すると、勝手に手が動いて、彼の性器に伸びていた。優しく扱って、最後の一滴までをも絞りだす。

「ふあ、あ、あう、んんっ、あ、あ」

ぴく、ぴく、と動くムクは、うっとり快感を受け入れて、僕の手首を握っていた。ほとんど手に力が入っていないので、甘えるために握りしめているのだろう。潤む瞳には、じっとりと僕に次なる command を求める欲深さも滲んでいた。

「ちゃんとイケたね。Goobboy」

「ん、ふふ.....。当然、だね.....」

けれど最後にケア目的で放った command を皮切りに、ムクの顔が少しずつ下がっていく。そのまま下瞼とくっつくと、それきりムクは目を開かなくなった。規則的な呼吸は安定していたので、おそらく単純に眠りについてしまったのだろうと予想できた。

「っ、く...！」

僕も限界だったので、一度ムクから引き抜いて、ゴムを取ってから軽くこすって、彼の出した精液の上に自分の分も放つ。そしてドロドロのお腹の部分を見ているうちに、僕にも強烈な睡魔が襲ってきた。流石にそのままにはできないので、なんとか自分の持っていたハンカチで彼の腹の上を綺麗にした後、あたりを見渡す。

何かせめてムクにかけてあげられるものはないかと視線を倉庫の角に向けると、なぜかこの埃っぽい倉庫には似つかわしくない、比較的見えそうな掛け布団がたたんで置いてあった。不自然だったが、今はこれを活用するとしよう。

一人用のそれは、僕とムクが二人でくるまるには少々サイズが小さかった。なので僕はムクを抱きしめて、なるべく彼に多く毛布の取り分がいくように調整してから、抗えないほどの強い睡魔に身をまかせて眠りにつく。

人生で初めて成功したプレイが、まさか本名も知らない相手とのワンナイトだとは思わなかった。しかも出したらシャワーも浴びずに寝落ちだなんて、随分ただれているもんだと思う。それでも肩に当たる寝息がひどく愛おしくて、そうか、これがD o mとしての幸せなのかと、僕は彼から教えてもらった。

それと同時に、実は彼を肉体的にも精神的にも、僕が満たしていたのだということは。もっともっと後に、本人から直接聞くことになる。

体験版はここまでです。